

論文名：特別養護老人ホーム入所者における自発摂食評価と死亡率との関係：
2年間の縦断研究

(要約)

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 坂本 まゆみ

本研究では、Self-Feeding assessment tool for the elderly with Dementia (SFED) を用いて、特別養護老人ホーム入所者の自発摂食能力を調査し、その後 2 年間観察し、要介護高齢者の自発摂食能力と死亡発生との関連を検討することとした。

日本の 5 つの特別養護老人ホームの入所者 387 名に対して、ベースライン調査を行い、その後 2 年間の死亡発生情報を収集した。ベースライン調査では、入所者の基礎情報(性、年齢、身長、体重、既往歴)、Barthel Index、Clinical Dementia Rating、Mini Nutritional Assessment®-Short Form、および SFED を調査した。最終的にベースライン時に経口摂取していなかった 10 名と死亡についての情報が得られなかった 36 名を除外した 341 名を 2 年間に死亡した死亡群と生存群の 2 群に分け、SFED およびその他の死亡発生と関連のある項目を交絡因子とし Cox 比例回帰分析により解析を行った。

観察期間中死亡した対象者は 129 名 (37.8%) であった。SFED の平均スコアは死亡群は 11.1 ± 6.7 点、生存群は 15.0 ± 5.6 点で死亡群は生存群に比べ有意に低かった ($p < 0.001$)。また、Cox 比例回帰分析の結果から、性、年齢、既往歴、BI、CDR、MNA®-SF で調整した後、SFED は有意に 2 年間の死亡発生と関連していた ($HR: 1.063, 95\%CI: 1.015-1.114, p=0.010$)。同様に、SFED の項目別の分析では「ゼリーなどの容器やパッケージを開けたり、紙パックにストローを挿入することができる」、「食物をこぼすことなく食べることができる」、「食べることに注意を維持することができる」、「むせることなく嚥下することができる」の 4 項目が有意に死亡発生と関連していた。

以上の結果から、SFED による自発摂食評価は特別養護老人ホームにおいて長期的な死亡発生と関連していた。このことから SFED を指標とした日常的なアセスメントに基づいた食支援は特別養護老人ホーム入所者の自発摂食能力を維持し要介護高齢者の生活の質を支えるとともに、終末期ケアに根拠を与え、ケアの質の向上に大きく貢献すると思われる。